

J.S.V.R. ニュースレター

発行人 バレーボール学会
会長 松 岛 中 二
発行日 2005年10月1日
事務局
〒444-0005 国崎市西河原山12-5
愛知県立大学 復興研究室内
TEL 0564-48-4511 FAX 0564-48-7756
E-mail : jsvr@esu.ac.jp
<http://www.jsvr.org/>

バレーボール学会

The Japanese Society of Volleyball Research

No.12
2005.10

< 卷頭言 >

第23回ユニバーシアード大会の報告

副会長 川合 武司

標記大会は2005年8月11日から21日までの11日間、参加170カ国、12競技種目、参加者約8,000名の規模でトルコ：イズミール市をメイン会場として行われました。日本チームは全種目にフルエントリーし、各種目での大学スポーツ及び日本民族の優秀性を世界各国に示すべく競技会で健闘しました。勿論の事、競技会の意義は参加各国の友好親善及び各国ユニバーシアード参加選手の友好関係構築等があります。今回の参加選手・役員は競技会の意義を良く理解し、日常行動や競技活動の中で立派な成果を挙げたように思います。具体的な評価についてはメダルの獲得数にあると思います。総数で言えば、日本はロシアに次いで2位でした。また、友好親善での諸行動関係では、皮膚の匂いやイデオロギーの問題等を超越して積極的に目的を果たすべく努力している姿が随所に見られ、充分な資本を果たしたと思われます。私自身の事でいえば、若き日の浅学が榮り参加各の人々とコミュニケーションを図る事について不十分であった事は残念でありました。今後は老体ながら努力を心掛け徐々に進歩向上を図りたく思っている昨今です。尚、次回以降に参加される方々には計画的に知識を積み上げてコミュニケーションを図る力を高めておく事を希望します。

我々が参加したバレーボール競技は男子23チーム・女子22チームの参加国がありました。中でもメキシコチームの突然の棄権については少々驚きました。この事についてはゼネラルミーティングの際に当初の組み合わせを変更するという事態が発生しました。日本男子チームへの対応は少々ありましたが、南アフリカのチーム関係者は大幅な変更に怒りをあらわにしていた事が思い出されます。また、このミーティングの際に女子チーム監督である中西康氏がジュリーの補佐役(全役員中3名)として指名を受けた事は誇らしい事であったと思います。尚、この類のミーティングは全ての国際大会で行われるもので、スタッフ及び選手の確認(パスポート等による)、キャプテン及びリベロの申告、ユニフォームを持参してユニフォームカラーの確認等が、開催日前日に予備審査と本確認の2段階で行われます。また、場合によってはエントリーフィーの支払いやドクターの資格等が確認される事があります。この様な事前手続きを経た上でゲーム開始となります。

今回の大会で私に与えられた任務は男子チームのチームリーダーでした。この男子チームにつきましては横山和明監督、慈永文利コーチのもと2年前からチーム構築(チームビルディング)に入り、強

J.S.V.R.

い結束力を持っていました。私自身も昨年から関係させて頂きましたが、選手一人一人を大人として扱い自主性を尊重する中で規律を重んじ、モチベーションを高める積山監督を中心とする指導スタッフの指導力は目を見張るものでした。戦力につきましては結束力を高めつつ技術・戦術の鍛錬に入った様でした。北島(筑波大出)・谷村(中央大出)・小川(順大)のエース対角、柴田(筑波大出)・金子(東海大)のスーパーイース、赤田(東海大出)・鈴木(東海大出)・石島(筑波大)のセンターライン、ユーティリティスパイカーの宮松、阿部(東海大出)・内山(東海大)のセッター、酒井(東海大出)のリベロ、以上12名の選手は各人が各自の任務を良くわきまえ、実に良く頑張ってくれました。選手個人の戦績につきましてはJVA発行の機関紙にて確認いただければと思います。この日本チームの戦術的特長は世界的に見て中型プレーヤーチームでしたが、スピードと変化のある攻撃は出場チームの中で際立っていました。また、リベロの酒井を中心とする守備力でも他国に較べ上回っていました。初戦のセルビア戦では息の詰まる接戦ながら3対0のスコアで勝利し波に乗ったのが決勝戦まで進む足がかりになったように思われます。その後はデンマークに3対0、強敵と思われたポーランドにも3対0、予選最終戦では香港に3対0と破竹の勢いで進み、予選1位で決勝トーナメントに進みました。準々決勝ではイランに3対0、準決勝のブラジルとの対戦では第1セットを23対25で失するものの、以後3セットを連取して勝ち進みました。そして、いよいよ決勝戦は地元トルコとの対戦になりました。収容人員3,500名の体育館は4,000名近くを入れての超満員となる中での試合展開となりました。日本は1、2セットを連取してのスタートとなり有利な展開でゲームが進行しました。しかし、後半驟然たる状況に一変し、日本チームの選手は各々我を失うが如くになり3セットを連取される事となりました。その結果は既に残念ながら2位・銀メダルになった次第です。以上の結果から考えますと、ミュンヘンやモントリオールのオリンピック等で優勝の栄誉を勝ち取っていた人々の偉業はとてもなく妻い事と実感した次第です。今後はこの体験を踏まえて更なる上昇を期待するものです。女子チームの状況については13位の成績でした。この事は初戦で対戦したロシアチームとの戦いで惜敗した後遺症による結果と思われます。試合会場が男子と異なり、私自身は見ていないゲームですので憶測での感じをお伝えすることになります。後半のゲームでは大型の強豪チームにも勝利している結果があります。この事からは参加各国の実力差が紙一重であったと言えます。成田チームリーダー、中西監督、今丸コーチ等は良く結束して指導にあたり、後半のゲーム結果から見れば良くまとめたという感じがします。ゲームの進行状況についてはJVA機関紙でご覧いただければと思います。初陣であった中西監督、今丸コーチには次回のパンコク大会に向けて再スタートしてもらいたいという個人的希望を述べさせていただきます。

最後にこのユニバーシアード大会は年を追うごとに大きく発展している様相が窺えます。今後は充分の時間と計画的練習が日本チームの命運を決める事のように思われます事を述べさせていただき、巻頭の一節とさせていただきます。